

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：下出 茉莉 作成日：2025年1月5日

### 1. 教育の責任

大手前大学の「生涯にわたる、人生のための学び」という建学の精神に基づき、自らの関心を探求する力を養うことを目的に教育の実践を心がけている。

「日本文化史」（春学期、2単位、35名）、「工芸論」（春学期、2単位、16名）、

「アジアの文化に親しむ」（春学期、2単位、179名）

「日本美術工芸史」（秋学期、2単位、81名）、「日本美術史特論」（大学院、秋学期、2単位、4名）

「比較文化の基礎」（秋学期、2単位、52名）、「日本文化・アジア文化研究」（秋学期、2単位、37名）

### 2. 教育の理念

日本が現在まで脈々と培ってきた「芸術」や「文化」の成り立ちを理解することは、物事のあらゆる側面に目を向け、柔軟な思考力を身につけていくことにつながると考える。そのため一般教養としての美術史、文化史の理解に努めるほか、自分の目でものをしっかりと見て、文献等の資料から必要な情報を得て、知り得た情報を自身の主張のもとに適切な言葉で表現していくという一連の能力を養う教育を目指したいと考えている。例えば美術史においては、一つの作品を語る際に、ただ、「きれい」、「怖い」という言葉だけでは、客観性をもった論証にはならない。その作品の何がきれいなのか、何が怖いのか、その要素は何に起因するのか、根拠は何か、ということをしかりと考え探求し、相手が理解しやすい適切な言葉に変換して伝えるという一連の思考力、発信力が必要となる。これらの能力を獲得することは、豊かな人間性を形成していくことに必要不可欠なものであると考えている。

### 3. 教育の方法

「日本文化史」、「日本美術工芸史」では、日常生活ではなかなか触れる機会の少ないテーマを扱っているため、授業時に学生が理解しやすいよう工夫している。具体的には、毎回の授業のはじめに、前回授業内容の復習を10分程取り入れ、また授業の終盤には本日扱った授業内容のまとめの時間を取り入れるようにした。また、授業終わりに小レポートを執筆させ、授業で扱った内容をその場で整理し、できる限り理解して帰ってもらえるよう工夫した。

「工芸論」は、受講生の大半が建築&芸術学部の学生であったため、できるだけ工芸の成り立ちや歴史的な変遷を中心に講義内容を構成し、理論的に工芸を理解できるように努めた。また、理解度の確認を行うため中間テストを行い、テスト終了後は、テスト内容の解説を行った。

「アジアの文化に親しむ」、「比較文化の基礎」、「日本文化・アジア文化研究」においては、オムニバス形式であり、担当教員によって授業内容が異なるため、東アジアを一つの文化圏にとらえ、共通の工芸品（例えばやきものや漆器）を採り上げ、それぞれの国でどのように発展したのか、共通点と違いが分かるように授業内容を構成した。

これら私の担当する授業は、もの（作品）を見て理解するというのが大前提となるため、文字だけの説明にならないようできる限り画像を提示し、作品の細部まで視覚的に理解できるよう工夫を行った。

### 4. 教育の成果

「日本文化史」、「日本美術工芸史」では、受講生の理解度を確認するため、毎回の授業終わりに小レポートの執筆を設定し、次の授業時に3~4名のコメントを紹介することを行った。学生たちも他の受講生のコメントを知る機会となり、またそれが刺激になっていたと思われ、授業回数を重ねるごとにコメント内容が全体的に充実していくことが実感できた。コメントペーパーに寄せられた質問は、受講生全体が共有できるよう、授業初めにコメントを紹介する際に一緒に回答を行った。

また、完成作品だけでなく、制作工程の画像を提示しながらの解説も行ったため、制作の手順や成り立ちがよくわかり興味深かったという学生からの反応があり理解を促せたと感じた。参考文献を紹介してほしいという声や、関連の展覧会にも足を運んでみたという声も聞かれたので、今後も学生の視野を少しでも広げられるような授業を実行していけるよう工夫したいと考えている。

キャリアデザインの授業では、授業内でのワークを実施する際は適宜巡視を行い、できるだけ学生一人一人に声をかけながら、授業

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：下出 茉莉 作成日：2025年1月5日

内容をしっかりと理解できているか確認を行うようにした。アンケートでは、「その場で分からないことを質問しやすかった」、「自分のペースに合わせて作業を進めていくことができ授業を受けやすかった」という回答があり、巡視する際の声掛けの必要性を実感した。今後もできる限り学生一人一人に目を向けて授業を実践していくよう心掛けたいと思っている。

### 5. 改善への努力と今後の目標

今年度は、本学に着任して二年目であり、昨年に続き多数の授業が未経験のものであった。そのため、どのように各授業を行っていくことがベストなのか、受講生の様子を見ながら内容を工夫していくように心がけた。手探り状態ではあったが、受講生の反応や授業後の小レポートの内容を確認しながら、授業内容や進め方を毎回細かく調整した。

次年度以降は、見学などの学外での学習の機会も積極的に取り入れていきたいと考えている。引き続き、受講生の反応を注意深く確認しながら、学生の積極的な学びにつながるような指導を心がけていきたいと思っている。

### 【添付資料】